

社説の日英分析

——節と伝達的単位の枠組み分析——

佐々木 真

『閑花集』愛知学院大学短期大学部人間文化学科五十五年記念論集 抜刷

平成18年(2006年)3月31日 発行

社説の日英分析

——節と伝達の単位の枠組み分析——**

佐々木 真

はじめに

本論では日本語と英語の社説を比較し、選択体系機能言語学（以下 SFL と略す）の枠組みにおける日本語分析ならびに日本語記述の妥当性を考察する足がかりとする。SFL においては文化的なイデオロギーから始まり、コンテキスト、談話、語彙文法、音韻のレベルの各階層ごとに意味の生成や解釈に寄与する（Halliday and Matthiessen 2004; Matthiessen 1995）。中でも中枢的な機能を担うのは語彙文法であり、言語表現による意味を規定する基幹と言える。従って SFL の中で意味の単位として規定するテキスト分析においては、語彙選択とそれらが使用される言語構造分析が起点となる。

Halliday の選択体系機能文法を記述した *An Introduction to Functional Grammar* (Halliday 1985, 1994; Halliday and Matthiessen 2004) では英語の節 (clause) を基点とし、上は節複合から談話レベルにおける照応関係にまで言及し、下は句のレベルまで扱っている¹⁾。第三版にまで改訂されたこの書は入門書というタイトルにもかかわらず詳細な考察と細かい分析を記載し、SFL の実質的バイブルとも言及され²⁾、この考え方を日本語にも当てはめようとする試みがなされている（佐々木 1997; Thomson 1998; 塚田 1998）。

しかしながら、ここでひとつ留意すべき点として理論と記述の区分があげられる。日本の言語学者はともすれば西欧流の言語学理論がそのまま日本語

にも当てはまると考えて応用するが、たとえば英語を基準とした言語理論は理論と英語という言語の記述が重なり合ったものだという危険性がある。Halliday の文法書が理論的な枠組みを提示している一方で、同時に英語の記述であるという点を忘れ、そのまますべての言語に当てはまるという考えに陥ってしまうのは危険なことと言えるだろう。したがって、SFL における概念的な枠組みは適用するものの、言語プロパーに直接的にかかわる語彙文法のレベルでは扱う言語固有の構造を十分に考慮する必要がある。

本論は日本語の分析においてどのような立場をとるのかを伝達的単位（龍城2000, 2004）という観点から再考する。英語と同様に節（あるいは文）のレベルでの分析と伝達ユニットでのそれを比較して、日本語を記述するにはどちらの立場が記述的な妥当性が高いかを導き出す研究の端緒となれば幸いである。

1 英語の節と日本語の節

SFL 理論において節が分析の起点になるのはここにこの理論で最も重要視する言語の機能、特にメタ機能と呼ばれる働きが集約されているからである。これらは表現の提示する情報構造を司るテキスト的機能、表現の情報提供／情報探求を司る対人的機能、表現の意味内容を直接的に司る観念的機能である。英語の場合、これらの機能においては節頭に表出する項目がその重要な担い手を兼務する。例1に英文と3つのメタ機能を例示する。

例1 Makoto is showing slides in the classroom.

主題	題述		
主語	定性	述語	残余部
行為者	過過程中核部		対象 状況要素

上記の例では *Makoto* についての情報提示であるということから、テキスト的機能における主題の役割を担う。対人的機能においては定性を後に伴う主語として *Makoto* についての情報提供として機能している。もしこの主語と定性の順番が入れ替わると情報提供ではなくなり、疑問文として、情報探求

としての働きになる。さらにこの節が行為者としての *Makoto* の行為を伝えたものとして表現されている。このように英語の節の場合、最初の項目に何がきて、どのような順番で配列されるかは意味の伝達という観点からきわめて重要である。反対の見方をすれば、英語という言語では最初に現れる項目とそれにすぐ後続する項目が重要であり、それを明示するために節頭の役割をラベル付けした理論が作り出されたとも言えるのではないだろうか。

それでは日本語では同じようなことが見られるのだろうか。次の例を見てみよう。

例2 マコトは 教室で スライドを 見せ ている。

主題	題述		
主語	残余部	述語	定性
行為者	状況要素	対象	過程中枢部

一見すると同じようにマコトが主題であり、主語であり、行為者としても機能している。従って、英語と同じように節頭に意味の主要な働きが割り振られているように思える。ところが、日本語の場合、英語と比較して明らかに異なる点が二つあると思われる。

まず一つ目は述語と定性の部位である。英語では主語と定性の順序によって叙述という情報提供か、あるいは疑問という情報探索を規定する。また定性は同時に時制と態、極性をもコントロールする。したがって、節頭の主語と定性の順序が重要視される。しかし日本語の場合は節末までこなければ時制、態、極性の区別がつかず、次のような例ではこのような主語と定性の組み合わせでは何も判断できない。

例3 マコトは 教室で スライドを 見せ ていない。

主語	残余部	述語	定性：否定
----	-----	----	-------

例4 マコトは 教室で スライドを 見せ ているか。

主語	残余部	述語	定性：疑問
----	-----	----	-------

従って対人的機能に重要な主語と定性については節頭よりも節末が重要な因子となる。英語では主語と定性の組み合わせで表現される機能が、日本語で

は定性と態が結合したのものとして付加されることにより具現化される。

日本語の節末の扱いについて Nanri (2005) がその重要性を強調している。Nanri は日本語の主題の扱いを通じ、いくつかの節に共通する大枠の主題は節頭で提示され、各節を結びつける意味の結束性は節末の過程中核部が担っているとしている³⁾。その中の一つ一つの、節末に着目して、その両者の組み合わせによってテキスト分析をするべきであると結論づけている。

“Textually significant information can be presented at initial position in the clause. But it also can be presented at final position in the clause in Japanese. ... Theme-oriented textual analysis and clause-final Process-oriented textual analysis must be complimentary to each other. We cannot make any further progress in Japanese textual studies with the former analysis alone.” (Nanri 2005: 78)

もう一つの差異は省略である。日本語の場合必ずしも主語が現れない。例5において次のような節が考えられる。

例5 教室で スライドを 見せ ている。

題述			
残余部		述語	定性
状況要素	対象	過程中核部	

例5においては対人的機能関係で重視された主語はないが、情報提供／情報探索を規定することに影響は及ぼしていない。またこの省略は他の二つのメタ機能にも影響を与える。すなわち主題と行為者の省略である。日本語の場合、一人称が主語、主題、行為者を兼務するとき省略される。したがって例5であれば「私は／僕は」などの一人称を補って考えることができる。また他に先行する節がその主語を示していれば、それを補って考えることができる。英語の分析でも *I* が省略された節の扱いが示されている (Eggs 2004)。

しかし、日本語の省略では英語のように復元される項目が簡単には同定できない場合もある。例えば、次の例をみてみよう。

例6 その本が 欲しい。

題述	
残余部	述語／定性
現象	過程中核部

通常このような節があると、省略されている要素は一人称を示すもので、「私は」「僕は」などを補うのであろう。しかし筆者の子供や最近の学生は自分を示す一人称の代名詞を使わず自分の名前を一人称の代名詞として使い、発話することが多い。筆者であれば例7のような発言が頻繁に出現する。

例7 マコトは その本が 欲しい。

マコトは	その本が	欲しい。
主題	題述	
主語	残余部	述語／定性
感覺者	現象	過程中核部

一人称を示すという機能に変化はないが、実際にどのような語彙を用いるのかということは文化的脈絡、状況の脈絡などの観点、あるいは文法的観点からも「選択」という概念を重要視するSFLにおいては無視できないものであり、省略された部位にどのような項目を復元するのかはメタ機能上の役割を考えると単純に機械的に処理できるものではない⁴⁾。

さらに日本語の省略と英語の省略ということについて言えば、復元そのものの妥当性があげられよう。例8を見てみよう。

例8 マコトは シドニーへ 行き、 買い物をした。

主題	題述	題述	
主語	残余部	述語／定性	述語 定性
行為者	状況要素	過程中核部	過程中核部

パブで ビールを飲み、 酔っぱらって、 客と けんかをした。

題述		題述	題述		
残余部	述語	述語	残余部	述語	定性
状況要素	過程中核部	過程中核部	状況要素	過程中核部	

この例では初出の「マコト」が後続する節の中で省略されていると考えられ、復元すれば例8'のようになるだろう。なお、復元される要素は []

で括ってある。

例8' マコトは シドニーへ 行き, [マコトは] 買い物をし た。

主題	題述		主題	題述	
主語	残余部	述語/定性	主語	述語	定性
行為者	状況要素	過程中核部	行為者	過程中核部	

[マコトは] パブで ビールを飲み, [マコトは] 酔っぱらって,

主題	題述		主題	題述
主語	残余部	述語	主語	述語
行為者	状況要素	過程中核部	行為者	過程中核部

[マコトは] 客と けんかをし た。

主題	題述		
主語	残余部	述語	定性
行為者	状況要素	過程中核部	

例8'では省略されている要素を復元したが、英語的分析法によればこれにより、この例の主題はすべて「マコト」にあり、この節複合は「マコト」について述べられたものだという結論になる。しかしながら、現実的にはこの節は日本語としては大変不自然なものと感じられる(玉村1992)。たとえ復元されるべき要素が「私」のような一人称であったとしても同様である。単純に省略しても復元してもいいという二者択一ではなく、むしろこれがあってはならないという規則性が働いていることに注意しなくてはならない。

ところがこれとは対照的に英語であれば例9のように省略を用いたものと、例9'のように省略された要素を復元されたものに日本語ほどの不自然さは感じられない。

例9 Makoto went to Sydney and did shopping.

主題	題述		テキスト形成の主題	題述
主語	述語/定性	残余部		定性/述語
行為者	過程中核部	状況要素		過程中核部

He had some beer at a pub.

主題	題述	
主語	定性/述語	残余部

行為者	過程中核部	対象	状況要素		
He	got	drunk	and	had a fight	with a customer.
主題	題述		テキスト形成的主題	題述	
主語	定性／述語	残余部		定性／述語	残余部
体現者	過程中核部	属性		過程中核部	状況要素

例 9' Makoto went to Sydney and [he] did shopping.

主題	題述		テキスト形成的主題	主題	題述
主語	述語／定性	残余部		主語	定性／述語
行為者	過程中核部	状況要素		行為者	過程中核部

He had some beer at a pub.

主題	題述		
主語	定性／述語	残余部	
行為者	過程中核部	対象	状況要素

He got drunk and [he] had a fight with a customer.

主題	題述		テキスト形成的主題	主題	題述
主語	定性／述語	残余部		主語	定性／述語 残余部
体現者	過程中核部	属性		行為者	過程中核部 状況要素

Eggs (2004) で説明にあるような *I* などの主題省略は英語の構造上、他に入るべき要素がなく、また統語上主語を求める位置が規定されるために省略された主題の語彙項目とその位置の再現には広く同意を得られるはずである。また「この命題は何についてのものか？」という情報を常に念頭に入れて情報交換をする英語ではこの分析よりこの節複合が *Makoto* についてのものであり、その次に必要な情報とも言える「何がおきたのか？」は直後に後続する題述内の定性／述語・過程中核部によって具現化される。

しかしながら Thomson (1998) のように日本語にその概念をそのまま応用して、「私は」のように表層に出ていない要素を補って考察する方法には疑問が残る。表層上に現れないものが文法的機能を帯びていることは明らかとはいえ、その現れない項目を恣意的に補って考えるということに妥当性はどれほどあり得るのだろうか。また根本的な問題として、日本語の節の区切りをどのように扱うかという問題が残っている (佐々木 1997b)。

節ごとに分析し、その一つ一つに必ずメタ機能のすべてが存在していると

いう前提に立って、それを充当するという英語的な手法はこれまでこの理論の記述への応用と考えられていたが、同時に英語の記述の日本語記述への適用という側面も同時にあったのであり、これによりこれまで列挙してきた問題点を生じさせていると考えられる。したがって日本語と英語の節ではその扱いを同じにするわけにもいかず、あらためて理論と記述の分離ということを認識して、日本語分析の新たな枠組みを検討する必要がある。

2 伝達の単位

Halliday はその著作の中で英語を分析し、理論を発展させてきた経緯を考えれば SFL 理論がそのまま英語という言語の記述としても妥当性が高いことは論を俟たない。しかしながら冒頭にも述べたように日本語というまったく系統を異にする言語でその手法をそのまま応用することにやはり疑問の余地がある。少なくとも、節頭ばかりではなく、節末の重要性を認識し、記述に取り込む必要があるろう。

そもそも日本語の分析と記述に際して、節という分節的な単位をその起点にすることを疑問視し、意味のまとまりを示す節の複合体を単位として、その根幹にすべきではないかと提案する研究者も少なくない。たとえばメイナード (1997) は「は」と「が」の機能は統語的単位 (すなわち節や文) では説明できず、談話レベルで考えなければならないと述べている。また森田 (1985) は物語文の中で時制を示す助詞に着眼し、それらが同じ時制に制御されている部分の一つのまとまりであると述べている。佐久間 (1992) は文のまとまりを内容面のまとまりとして重視した「文段」について論じている。澤田 (1993) は節や文をリニアに分析することを批判し「まとまり」という単位で捉えることを主張しており、この単位内では不必要な省略や補完を考える必要はないとしている。澤田の手法では先に挙げた例 8 では省略を認めず、例 8' のように補完することはしない。

さまざまな研究者の間でこの 10 年来、節の複合体を一つの単位とする考え方が取りざたされている中、特に SFL において龍城 (2000, 2004) がさら

に踏み込み、日本語の分析では節という概念そのものを外して考えるべきだと主張している。龍城は言語分析において念頭に入れるべき点を挙げ、明確に理論と記述を分けることと、個別言語の記述にはそれに応じた新しい概念や枠組みが誕生することがあると述べている。龍城の提唱する新しい概念とは、日本語分析において英語的意味合いでの節を当てはめず、節⁵⁾の複合体によって具現される意味のまとまりを分析単位とすることである。この単位を「伝達の単位 (Communicative Unit)」と呼んでいる。

伝達の単位は日本語の主題・題述関係を分析する上で生まれてきた概念と言える。主題・題述関係はテキストのメタ機能の中でもテキスト的機能に関わっている。龍城(2004:5)は次のように述べている。

日本語話者はこのようにピリオドを超えたまとまりのある単位 (CU) の中で、それを構成している構成素の前後関係からその内容をいかに伝達するかを決定しているのである。この前後関係とは Halliday のいう「結束性」にも通じる概念であり、この結束性によって構成されたひとつの構成単位が「伝達の単位」と呼ばれる単位である。

伝達の単位では「スープラテーマ」⁶⁾と呼ばれる主題がカバーする範囲内を網羅する。還元すると、伝達の単位とは節の複合体でスープラテーマという大枠の主題が関わるものとして結束するテキスト機能的な単位である。そして、それを構成する節(正確には疑似節)は統語的なレベルとして扱われ、レベルの区別を明確にするために「CU 構成素」と呼ばれる。先に挙げた例 8 を伝達の単位の上から表示すれば、スープラテーマは初出の「マコト」であり、これに続く節はすべて「マコト」の意味的支配下にあるものであり、CU 構成素として機能する。あえて、省略と復元という概念を適用しなくても次の図 1 のように解釈することにより一つのまとまった単位で意味を形成すると考えることができる。

マコトは (スープラテーマ)	
シドニーに行き	(CU 構成素 1)
買い物をした。	(CU 構成素 2)
ビールを飲み	(CU 構成素 3)
酔っぱらって	(CU 構成素 4)
けんかをした。	(CU 構成素 5)

図1 スープラテーマと CU 構成素の例

この伝達の単位では、従来英語と同じように節を起点として日本語を分析する場合に直面してきた諸問題を回避でき、また意味を重視する SFL の趣旨を踏襲している。またこのテキスト機能的な単位はその内包する CU 構成素の中に具現される述部に他のメタ機能である対人的機能、観念構成的機能の分析を可能にし、SFL で前提とする言語の機能性と合致する。従って、本論でも伝達の単位を分析の枠組みとして用いることとし、データ分析では従来の節を用いた分析と伝達の単位を用いて同一のデータを分析した場合にどのような差異が出るのかを検証することとする⁷⁾。

3 二次的主題：釘主題

SFL でいうメタ機能の中でもテキスト的機能は「何について」述べられているか、そして、どのような結束性があるのかということが問題になる。英語の場合は主題⁸⁾の占める意味合いが大きく、その主題が同じものであるか、あるいは同意語⁹⁾の使用や代名詞化などの意味的な結びつきがあるのかによって結束性を生み出し、英語の主題の流れを追うことによってそのテキストが何について記述されているかを明示することができる。

ところが日本語の場合は節頭の省略と復元の問題があり、それを解決するために伝達の単位を取り入れるとしても、もうひとつ新たな問題が残る。すなわち伝達の単位内において、意味の結束性はどのようにしてなされるのかということである。換言すれば、CU 構成素内のどこでその結束性の機能を負うのかということである。英語では各節の主題を追跡することでテキスト

の意味内容を追うことができるが、日本語で伝達の単位におけるスーパーテーマの支配する領域が膨大であればあるほど、スーパーテーマだけでその支配下にある伝達の単位内の意味を明確に表示することができない。例えば例8のように「マコト」の行動を何十となく列挙すれば、その伝達の単位内において示されるが、その単位内の行動はどのようなつながりがあるかは明白ではない。

英語の主題の場合は「何についてか」を示すという機能と、節と節をつなぎ止める、いわば釘的機能の二つがある。この機能を一体と見るか、あるいは別々の機能が偶然一致して融合しているのかと考えるだけでもその対処法は大きく異なる。例えば前者をとれば主題以外の項目を設定する必要はないが、後者の考えであれば、日本語分析において釘的機能はどこで具現化されるのか、その部位を設定する必要がある。

この釘的機能については Nanri (2004) が「結束性を示す釘としての過程中心部」(Nanri 2004: 75) を提唱し、何について述べているのかという主題を「話題的主题 (Topic Theme)」, 釘の役割を果たすものを「釘主題 (Peg Theme)」と呼び、この二つの働きが日本語では別々の位置と項目で具現化されると述べている。すなわち話題的主题は「は」や「が」に先行する名詞句で主に節頭で具現化され、釘主題は節末の動詞、助動詞、助詞の述部によって具現化される。節末に着眼点を置くというのは先に挙げた森田(1985)の助詞の時制がまとまりを示すという主張とも符合する。

この釘主題は伝達の単位内の CU 構成素がどのように、何を伝えているのかを探る上で一つのキーになるだけでなく、同時に、伝達の単位の抱える問題、すなわちどのように伝達の単位を同定するのかという問題の糸口にもなっている。伝達の単位は同じスーパーテーマの支配下にあるが、その単位の区切りを示すマーカーなどがあるわけではない。スーパーテーマそのものが句読点を超えるものだから、句読点という表層的なものはそのマーカーになる可能性は低く、会話であればそのようなものもない。この時に、節末の釘主題の中で使用される定性や助詞が一つの意味境界を示すと考えられる。森田 (1985) が記述しているように過去時制で語られている物語文であって

も、主人公、あるいは著者の視点の変化が現在時制での使用によって表現されていることから、釘主題の時制の一貫性が一つのまとまり、すなわち伝達的単位の境界を示すマーカーになると思われる。

話題的主题、釘主題という考え方は伝達的単位という概念と対立することはない。むしろ伝達的単位内における主題の精緻化、あるいは結束性をさらに詳細に記述することを可能にする補完的關係にあると見るべきであろう。したがって、本論では伝達的単位と同時にこの釘主題の考え方を取り入れ、これらを組み合わせることによって日本語の分析、特にテキスト形成的機能について分析を試みることにする。

4 目的とデータ

本論では伝達的単位と釘主題がテキスト分析にどう反映されるかを検証するために実際のテキストを分析し、従来の節を用いたものと知見において何が異なるかを明示することとする。そこで分析では同一のテキストを節による分析と、伝達的単位と釘主題の組み合わせによる分析の二つで行い、その差異を比較することとした。また節分析の参考として、英語での節分析も行うこととした。

データは2004年2月3日付けの朝日新聞社説を用いた。このデータは朝日新聞のサイト (www.asahi.com) に掲載されている日本語の社説、およびその英語訳からそのままコピー・ペーストをし、分析を試みた。朝日新聞の社説を用いた理由は同社のサイトに社説やコラムなどの英語訳が掲載され日英比較をする上で、データ収集が簡便であったからである。

本研究では試験的な分析を行うことに主眼をおき、社説のすべてを分析せず、最初の5段落を分析することとした。また実際に分析した箇所は資料編中において下線を引いて示してある。

5 分析と考察

分析では次の手順を踏んだ。まず比較対照とする英語訳のデータの主題／題述分析を行い、そこに見られる主題の流れがどのようなもので、日本語のデータにも同じようなものが見られるかどうかを考察した。図2にあげるのはその英語訳のデータ分析で、それぞれ節番号と主題／題述である。

これらのデータ分析の中で示される主題の中で、接続詞などのテキスト形成的主題や对人的主題を除去した話題的主题の流れを図示し、そこに意味的なつながりが見られるところに矢印をつけた。ただし題述のみの節3、節10、節14は除外してある。

図3によると、英語訳の場合、節頭の主題の流れには代名詞あるいは同意語の使用によって意味的にまとまった一連の流れがあり、結果的に結束性の維持をする働きをしている。この分析図による主題の流れを追ってみると、二つの意味のまとまりがあることに気づく。すなわち、*SDF*や*SDF personnel*、*SDF troops*という語によってまとまっている自衛隊に関する記述と*we*を主題とした意見の陳述ということである。なお、*you*という語は直接引用節の中で使用されているものなのでこれらは呼びかけの対象となっている自衛隊員であり、意味的には*SDF personnel*と呼応する。これらのまとまりを囲い、図中では「自衛隊に関する記述」の部分とラベルを付けた。また*we*でまとまったものは社説の柱とも言える新聞社の意見である。かならずしも*we*という主題が意見ではなく、もしこれが物語文であれば我々に関する記述かもしれない。しかし社説というジャンルの特徴としては一人称で語られるものは意見の方が一般的であり、そういった観点からも英語の主題を追尾することは、そこにどのような内容が表現されているかを知る大きな手がかりとなる。そういった意味で、英語の主題は「何について」ということを知らせるだけでなく、ここにはどのようなことが表現されるのかを予測するシグナルになっているとも言えるのではないだろうか。

またこの図では主題を結びつける線が多い。まさに節や主題を結びつける「釘」の役割を十分に認識することができる。この釘機能を明示する指数な

1	The deployment of the main body of Ground Self-Defense Force troops to Iraq	got under way Tuesday.
	主題	題述
2	Altogether, about 1,000 Ground, Maritime and Air SDF personnel	will be working
	主題	題述
3		to help rebuild the war-torn country by spring.
		題述
4	The tasks they face-even such basic jobs as water supply and medical services-	will be harder than anything they have attempted up to now.
	主題	題述
5	We	hope
	主題	題述
6	they	will be able to perform their duties in safety.
	主題	題述
7	We	reiterate
	主題	題述
8	that we	are opposed to sending SDF troops to Iraq at this juncture.
	主題	題述
9	The deployment	was politically and legally forced down the nation's throat,
	主題	題述
10		splitting public opinion down the middle.
		題述
11	It ... that we must sit and watch	is regrettable
	主題	題述
12	as SDF troops	are sent to Iraq under such
	主題	題述
13	But it	is a reality.
	主題	題述
14		Addressing the troops Sunday at a send-off ceremony in Asahikawa, Hokkaido,
		題述
15	Prime Minister Junichiro Koizumi	reminded them:
	主題	題述
16	You	are not going to war,
	主題	題述
17	and you	are not to take part in operations for eradicating terrorists.”
	主題	題述
18	He	also stressed
	主題	題述
19	that SDF troops	are not supposed to use force.
	主題	題述

図2 英語訳の主題／題述分析

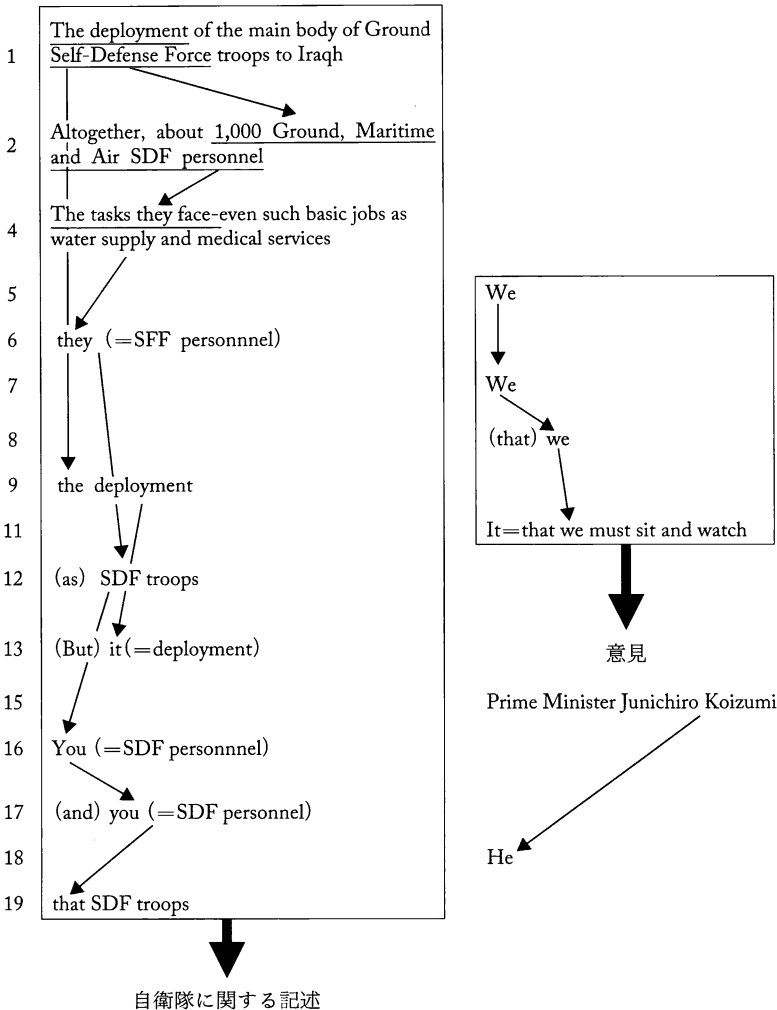


図3 英語訳の主題の流れと意味的つながり

どはないが、例えば、これらの意味の結束性を示す一つの指標として、主題の数と結束線の数を使うという事はできないだろうか。すなわち、主題の数とそれらの結びつきを示す線を引き、その数の割合を用いるのである。例えば、このデータでは主題が16あり、それらを結びつける結束数が13ある

ので、その比率を16対13とし、総主題数のうちの結束線の割合をパーセンテージ換算すれば、81.3%となる。SFLでは書き言葉と話し言葉を分析する指標として語彙密度（総語彙数の中で内容語の占める割合）を使う。したがって、今回はこの結束線を使用するものについて「主題結束密度」という名前を与え、一つの目安として使用することとする。

つぎに日本語のデータについて節に区切り、従来通りの節分析を適用して主題と題述の同定を行った¹⁰⁾。省略された主題を考慮して、それも再現して節分析を行ったものが図4である。

同様に、話題的主题についてその流れと、つながりを線で示したものが図5である。ただし、省略／復元された項目は結束線を破線で示してある。

図5の分析図を見てみると、節分析においても英語の分析のように、主題の示す項目は「派遣」、「隊員」、「作戦」、「武力」という語彙に表現される自衛隊の派遣について、「私たち」に表現される意見に分かれるようである。主題数15に対して、結束線の数が10であるから英語の分析例で提案した主題結束密度を使うと66.7%ということになる。

しかしながら、この分析でのポイントは本論の冒頭でも疑問を投げかけている省略とその復元という問題である。図4と図5で示されているものは省略されていると思われる項目とそれを復元した場合ということであって、残念ながらこれは分析者の恣意的な操作に依存することもあり得る。もし、省略と復元という操作をしなければ、この分析での主題の数は、11であり、結束線の数も6本となって、主題結束密度も54.6%と減少する。特に問題となるのは自衛隊の記述に関する項目については主題が明示されているものの、意見の陳述をする部分においては「私たち」が一度しか具現されていないということである。もちろん一人称の主題は日本語では現れないことが多いが、ここに「私たち」と復元するのか、「我々」と復元するのかという問題も生まれてくる。

英語の節分析に比べて、日本語の節分析の場合には主題結束密度が低くなるのは、英語のように代名詞化して同じ表現を繰り返し主語として使用しないことによるであろう。また一人称の語彙が表層に現れないことにもよるで

1	陸上自衛隊の本隊の派遣が 主題	きょうから始まる。 題述
2	春には 主題	陸海空合わせ千人の自衛隊員がイラクでの仕事に就く。 題述
3	給水や医療援助だけでも、 主題	自衛隊が経験したことの無い厳しく難しい任務となる。 題述
4	隊員が 主題	無事に仕事をこなすよう 題述
5	[私たちは] 主題	切に願わずにられない。 題述
6	[私たちが] 主題	繰り返し述べてきたように、 題述
7	私たちは、 主題	いまイラクに自衛隊を送ることに反対である。 題述
8	法律的にも政治的にも無理を重ねた派遣に、 主題	世論は大きく二分されたままだ。 題述
9	[私たちは] 主題	そんな中で自衛隊を送り出さざるを得ないことが残念でならない。 題述
10	だが、派遣は 主題	現実となった。 題述
11	小泉首相は、 主題	旭川で催された隊旗の授与式で…と訓示した。 題述
12	戦争に行くのでは 主題	ない 題述
13	テロ掃討作戦に参加するのでは 主題	ない 題述
14	武力行使は 主題	しないとも 題述
15	[小泉首相は] 主題	強調してきた。 題述

図 4 日本語データの主題／題述分析

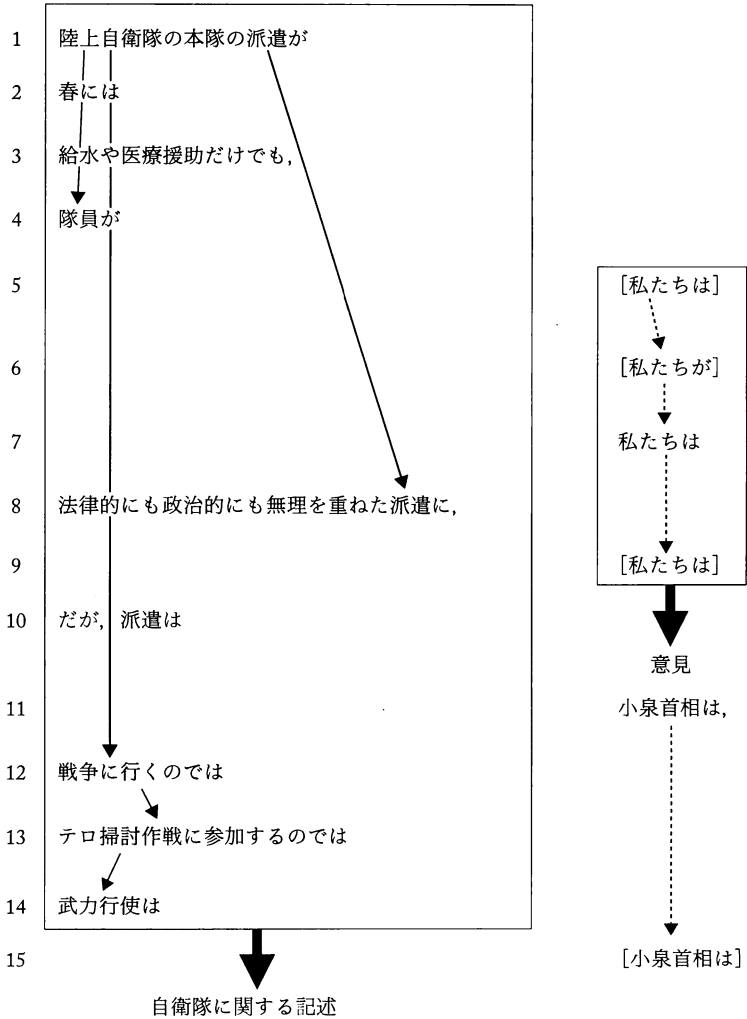


図5 日本語データの節分析による主題の流れと意味的つながり

あろう。従って、日本語の場合、節分析では主題結束密度の数値はさほど上がらないと考えられるが、だからといって結束がないということにはならないのではないだろうか。一つの考え方として主題結束密度という方策が日本

語分析には当てはまらないということがあるかもしれないが、同時に、日本語の節分析では主題結束が示されないという考え方もまたできるのではないだろうか。こういうことの検証としても次にあげる伝達の単位と釘主題の分析は日本語分析に異なったスペクトルからの明かりを照らす可能性がある。

次に同じ日本語のデータを伝達の単位内の CU 構成素として扱い、その中にある過程中核部を釘主題としてとらえたものが図 6 である。なお、伝達の単位においては同じスープラテーマをとることが条件となるが、今回のデータでは何がそのスープラテーマとなるのであろうか。暫定的ではあるが、今回はデータを支配下に置くことができるスープラテーマとしては社説のタイトルをとることとして分析を行った。節分析との比較という今回の課題のために、同じ範囲をデータとするため、この領域をカバーする大枠の主題としてはそれ以外に妥当なものが見いだせないとの判断からである。またこの分析データ内にはさらに細かい伝達の単位が見いだせる可能性もあるが、それは後述することとする。

図 6 の分析では釘主題については過程中核部を考えて、同定したが、ここに一つの問題がある。すなわち、過程中核部における動詞と助動詞、助詞だけで釘主題は構成できるのかということである。たとえば、日本語で多用される動詞に「する」があるが、実はこれだけでは動詞の意味を具現しているのかという疑問がある。構造的な分析では補語として「～を」というものを取り、例えば「仕事をする」とか、「家事をする」のようになるが、実際に意味を成立させるためには内容を示す語が必要不可欠なのであり、SFL の参与要素とは別のもので捉えるものであろう。そこで、データ分析においては「就く」などはこれだけでは不完全な過程中核部ととらえ「仕事に就く」として述語として分析している。「二分される」も同様の扱いをしている。

分析の結果は次の図 7 で図示してみよう。なお、スープラテーマと捉えることができるものには二重線を引き、そのスープラテーマが機能する伝達の単位は四角で囲んだ。

図 7 ではもっとも大きなスープラテーマを表題の「陸自出発——「戦地」

■陸自出発——「戦地」へ赴くつらさ	
1	陸上自衛隊の本隊の派遣がきょうから 始まる。 釘主題
2	春には陸海空合わせ千人の自衛隊員がイラクでの 仕事に就く。 釘主題
3	給水や医療援助だけでも、自衛隊が経験したことの無い厳しく 難しい任務と なる。 釘主題
4	隊員が無事に仕事を こなすよう 釘主題
5	切に 願わずにいられない。 釘主題
6	繰り返し 述べてきたように、 釘主題
7	私たちは、いまイラクに自衛隊を送ることに 反対である。 釘主題
8	法律的にも政治的にも無理を重ねた派遣に、世論は大きく 二分されたままだ。 釘主題
10	そんな中で自衛隊を送り出さざるを得ないことが 残念でならない。 釘主題
11	だが、派遣は現実と なった。 釘主題
12	小泉首相は、旭川で催された隊旗の授与式で…と 訓示した。 釘主題
13	戦争に行くのでは ない 釘主題
14	テロ掃討作戦に参加するのは ない 釘主題
15	武力行使は しないとも 釘主題
16	 強調してきた。 釘主題

図6 日本語データの釘主題分析

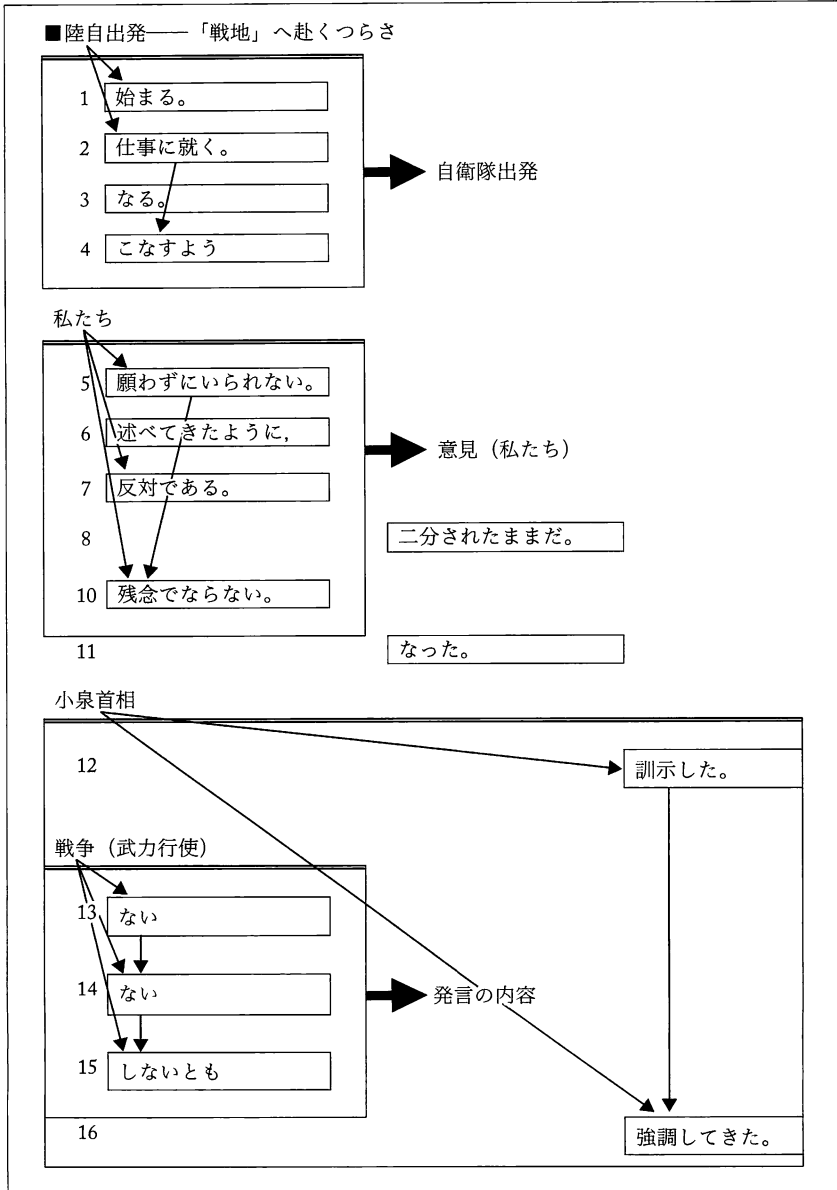


図7 釘主題の流れと意味的つながり

へ赴くつらさ」として分析を試みたが、表題には二重の働きがあることがわかる。すなわち、このデータ全体に流れる大枠としてのスープラテーマという側面と、この表題の直下で表現される一連の記述におけるスープラテーマとしての機能である。「陸自出発」というスープラテーマにより「何について」ということが表示され、次に CU 構成素内の釘主題が、スープラテーマにどのような意味の結びつきがあるのかを明示している。ここでの釘主題は陸自の出発に関連した「始まる」、「仕事に就く」、「こなす」であり、出発して仕事をするという意味においての結束性があるようである。また時制も現在時制で書かれており、これは日本語では現在から未来への出来事を示すということで一貫していると言えるだろう。そこで、これらをまとめて一つの伝達の単位と設定し、もっとも大きな単位内に存在する埋め込み式の小さな伝達の単位とした。

次の釘主題の流れをみると、また別の伝達単位が埋め込まれているようである。すなわち、釘主題の中で「願う」「反対である」「残念である」という動詞表現は心理的過程を表現するものであり、当然、その主たるものは文中でも表記されている「私たち」となる。節分析で用いた復元を使わなくても、過过程中核部で用いられる動詞のタイプ、すなわち過程形のタイプによってそこに一貫性があれば、同一の参加者が中心となっている単位ととることができるのではないだろうか。この分析では「私たち」をスープラテーマとする伝達の単位があり、その心理表現という一貫性が結びつける単位とした。また同様にして、「小泉首相」をスープラテーマとする伝達の単位も設定し、その中に小泉首相の言説内容をさらに下位の伝達の単位として埋め込んでいる¹¹⁾。

図7では節分析の分析とは主題結束線の構成の仕方が明らかに異なっている。これはスープラテーマと釘主題との関わり方による。すなわち、スープラテーマと釘主題の関係は同等の名詞的結束というよりは「何がどうなる」という主述的な情報性が動機となっているからである。これにより結束線はスープラテーマとそれが引き起こす内容の関連性がむしろ重要になり、例えば、意見の陳述においては釘主題同士の意味の結束性は薄いものの、すべ

て心理的過程を表現するという点においては一貫したものがある。そして結果的にこれらは社説内の意見の陳述という部位を形成する。この点が節分析による名詞を中心とした結束性とは大きく異なる点と言える。また釘主題相互においても意味の関連性が認められるものがあり、たとえば、「訓示した」、「強調した」などはともに発言を示す直接的な結束が認められるので、これも結束性の強化に寄与していると思われる。上記の考察と仮定をもとにここでの主題結束密度を出すと、釘主題が15あり、結束線が15本あるので、指数は100%となり、節分析の場合と比べるとその高さが際立っていると言える。

6 結論と展望

本論では日本語・英語のデータについて節分析、伝達の単位／釘主題という異なった分析方法を適用し、その記述において「主題結束密度」を設定し、比較の指数として使用した。この結果を表1にあげる。

表1 主題結束密度の比較

	主題結束密度
英語の節分析	81.3%
日本語の節分析	66.6% (54.6%)
日本語の伝達の単位／釘主題分析	100.0%

上記の表から英語では節分析、日本語では伝達の単位／釘主題分析を用いるとテキスト内の結束性をより顕在化できるということがわかる。また日本語の節分析では省略と復元の要素が大きく主題結束密度の結果に関わり、浮動する因子が大きい。これらの結果から、日本語の分析では伝達の単位と釘主題を組み合わせた分析がテキストの結束性を明らかにし、日本語の記述に適したものと結論づけられるのではないだろうか。

本論では新たに主題結束密度という指数を提案したが、これについてもこれからの検証が必要である。またこの指数の根拠となる主題結束線を引く根

拠をどこに求めるのかということも今後の議論的になるであろう。さらに伝達の単位の確定と釘主題の網羅する統語的範囲についても更なる議論と研究が求められる。本研究がその端緒としての役を果たすことができれば幸甚である。

* 本研究は2003年度在外研究（マッコーリー大学）の研究成果の一部である。

** 本論は31st International Systemic Congressでの口頭発表を加筆修正したものである。

注

- 1) 正確には意味層、語彙文法層、表現層のレベルに分けられる。句のレベルは語彙文法層で扱い、発音、書記といった表層に具現化されるものが表現層で扱われる。
- 2) ハリデー2001における訳者の図書案内を参照のこと。
- 3) この考え方は佐々木（1997b）で提唱した *transclausal theme* と *local-clausal theme* という概念と共通する。
- 4) 復元される語彙項目を何にするのかという問題の他にどの位置に復元するのかということも問題になる。日本語の場合は「は」が後続する項目は統語上位置を変化させることができる。もちろん、その位置によってその機能も左右される。
- 5) 伝達の単位を構成するものは正確には疑似節と呼ばれる。これは「節」を英語のように主語と述語で構成されるものという前提があるためで、日本語ではそうならないものが多いからである。また文法上の振る舞いとしては節に酷似していることから、疑似節としているが、本論では節という語を使うこととする。
- 6) 1997年の拙論（佐々木1997a）では節を超える主題が *transclausal theme*、節内の最初の項目を *local-clausal theme* と区別するよう提案したが、スーパーテーマでは節という単位そのものを前提としないという違いがある。
- 7) 伝達の単位は単にテキスト機能的単位であるが、この単位内で使用されるCU構成素について他のメタ機能である対人的機能、観念構成的機能が同時に扱われることとなる。CU構成素が統語的単位であるというのはこれを念頭に入れている。
- 8) 主題の多重構造の中ではテキスト形成的主題、対人的主題、経験構成的主題のそれぞれが関わるが、多重構造がない場合には経験構成的主題が関与する。
- 9) 例えば *the* と指示する事物を示す一般名詞の組み合わせなど。
- 10) 主題／題述分析と同時に、観念構成的分析、対人関係的分析も行っているが、本論ではそれについての言及は割愛し、別の機会に記述をする。
- 11) 小泉首相の言説内容はすべて「ない」という否定で示されており興味深い。為政者が肯定ではなく、否定形によって表現される内容というのはもっとマクロ的な批判的談話分析（Critical Discourse Analysis）の面から着目しても興味深いことと思われる。

参考文献

- Egins, S. 2004. *An Introduction to Systemic Functional Linguistics 2nd ed.* London: Continuum.
- Halliday, M. A. K. 1985. *An Introduction to Functional Grammar.* London: Arnold.
- . 1994. *An Introduction to Functional Grammar. 2nd ed.* London: Arnold.
- ハリデー, M. A. K. 2001. 『機能文法概説：ハリデー理論への誘い』(山口登, 寛壽雄訳), 東京：くろしお出版
- Halliday, M. A. K. and C. M. I. M. Matthiessen. 2004. *An Introduction to Functional Grammar. 3rd ed.* London: Arnold.
- Matthiessen, C. M. I. M. 1995. *Lexicogrammatical Cartography: English Systems.* Tokyo: International Languages Sciences Publishers.
- メイナード, 泉子. 1997. 『談話分析の可能性』東京：くろしお出版
- 森田良行. 1985. 「文章分析の方法」『応用言語学講座』第1巻「日本語の教育」, 林四郎(編), 東京：明治書院
- Nanri, K. 2004. “An Attempt to Elucidate Textual Organization in Japanese”, JASFL Occasional Papers. Vol. 3
- 佐久間まゆみ. 1992. 「文章と文——一段の文脈の統括」『日本語学』第11巻4月号
- 佐々木真. 1997a. 「日本語における theme 構造」『愛知学院短期大学研究紀要』第5号
- . 1997b. 「日本語の clause の分析：分類基準と clause の関係に焦点をあて」『ことばと人間』vol. 1
- 澤田治美. 1993. 『視点と主観性：日英語助動詞の分析』東京：ひつじ書房
- 玉村文朗(編). 1992. 『日本語を学ぶ人のために』京都：世界思想社
- Thomson, E. 1998. “Thematic Development in Noruwei no Mori: Arguing the need to account for co-referential ellipsis”, JASFL Occasional Papers. Vol. 1
- 龍城正明. 2000. 「テーマ・レーマの解釈とスーパーテーマ——プラグ言語学派から選択体系機能言語学へ」『言語研究における機能主義』小泉保(編), 東京：くろしお出版
- 龍城正明. 2004. 「Communicative Unit によるテーマ分析——The Kyoto Grammar の枠組みで」『同志社大学英語英文学研究』Vol. 76
- 塚田浩恭. 1998. 「日本語の「主語」に関する一考察」JASFL Occasional Papers. Vol. 1

資料

2004年2月3日 朝日新聞社説

■陸自出発——「戦地」へ赴くつらさ

陸上自衛隊の本隊の派遣がきょうから始まる。春には陸海空合わせ千人の自衛隊員がイラクでの仕事に就く。

給水や医療援助だけでも、自衛隊が経験したことのない厳しく難しい任務となる。隊員が無事に仕事をこなすよう、切に願わずにいられない。

繰り返し述べてきたように、私たちは、いまイラクに自衛隊を送ることに反対である。法律的にも政治的にも無理を重ねた派遣に、世論は大きく二分されたままだ。そんな中で

自衛隊を送り出さざるを得ないことが残念でならない。

だが、派遣は現実となった。

小泉首相は、旭川で催された隊旗の授与式で「戦争に行くのではない。テロ掃討作戦に参加するのではない」と訓示した。武力行使はしないと強調してきた。

ぜひ、そうあってほしいと思う。だが、首相自身の言葉にも「出征兵士」を送るがごとき悲壮感がつきまとう。サマワ周辺がいままでは比較的安全だったからといって、自衛隊が駐留すれば実際どうなるか分からない現実があるからだ。

自衛隊は、外国での戦争やテロに備えるために訓練されてはいない。武器の使用もここでは正当防衛に限られる。それもこれも、戦争放棄をうたった憲法の下で、自衛隊は普通の軍隊とは異なるからである。

襲われた時に武器を使わなければ身の安全が保てず、かといって使い方次第では憲法違反の武力行使になりかねない。この無理を承知で首相は自衛隊を送る。

何度でも言うておかねばならないことがある。まず、最高指揮官である首相は、派遣の根拠として国会が成立させたイラク特措法を厳密に運用しなければならない。

スペイン、イタリアなどの軍に多くの死傷者が出て、それぞれの国で活動や撤収のあり方が大議論になっている。日本の場合、自衛隊が襲撃されても、これは戦闘地域ではない、何が何でもとどまるのだ、という態度は国会が承認したものではない。そんな時、「テロに屈しない」と言い張るのではなく、状況次第で活動を休む。それは法治国家として当然のことだ。

行くからには、人々の役に立ちたい。だが、いきなりイスラム社会のど真ん中に入り込むだけに、住民と思わぬ行き違いやトラブルが起きかねないことは、自衛隊の場合も各国軍と変わるまい。現地の政治、経済や宗教的な事情にも十分配慮した活動を望みたい。

国会はいよいよ重い責任を負う。政府は必要な情報を公表し、与野党は事態の推移によっては派遣計画全体の見直しもいとわず、監視を続けなければならない。

そして、自衛隊の安全を高め、その活動を意味あるものとするためにも、米主導の占領終結と新たな統治体制づくりを早めること。それが、自衛隊を戦地に送る首相の何よりの義務となった。

Heading to a battle zone

The deployment of the main body of Ground Self-Defense Force troops to Iraq got under way Tuesday. Altogether, about 1,000 Ground, Maritime and Air SDF personnel will be working to help rebuild the war-torn country by spring.

The tasks they face—even such basic jobs as water supply and medical services—will be harder than anything they have attempted up to now. We hope they will be able to perform their duties in safety.

We reiterate that we are opposed to sending SDF troops to Iraq at this juncture. The deployment was politically and legally forced down the nation's throat, splitting public opinion down the middle. It is regrettable that we must sit and watch as SDF troops are sent to Iraq under such conditions.

But it is a reality. Addressing the troops Sunday at a send-off ceremony in Asahikawa, Hokkaido, Prime Minister Junichiro Koizumi reminded them: "You are not going to war, and you are not to take part in operations for eradicating terrorists." He also stressed that SDF troops are not supposed to use force.

We truly hope that will never come to pass. But the prime minister's words had a note of grim resolve, as if he realized he were sending these soldiers off to fight a war. Even if the region is now relatively safe, there is no knowing what will happen to SDF troops in Samawah once they get there.

The SDF members have not been trained for war, nor to combat terrorist acts on foreign soil. Their weapons can be used only in self-defense. That is because, under the war-renouncing pacifist Constitution, the Self-Defense Forces are no ordinary military force.

But what happens if they are attacked? The troops cannot protect themselves without using their weapons. Yet, depending on the circumstances, doing so could violate the Constitution. Although Koizumi fully recognizes the severity of this situation, he still sends the SDF to Iraq.

Here again we must stress, and for the umpteenth time, an important fact. The prime minister—the supreme commander of the Self-Defense Forces—is obligated to strictly administer, to the letter, the special measures law on Iraq passed by the Diet. It is the only legal ground for deploying SDF troops to Iraq.

Already there have been many casualties among Spanish, Italian and other military forces in Iraq. In these countries, controversy continues over their troops' activities in Iraq and whether to bring their troops home.

Let us suppose the SDF troops are attacked. Were the prime minister then to continue to insist that the area in which the troops are deployed is not a combat zone and order the SDF to remain come what may, that would be going against our national policy. The Diet has not approved such a scenario.

If such dire circumstances come to pass, the prime minister is obligated by law to interrupt the SDF's operations, not spout rhetoric about "not giving in to terrorism." That is what should happen in a country ruled by law.

As long as they are in Iraq, the SDF troops are supposed to be of use. Dropped smack in the middle of an unfamiliar Islamic world, however, they may run into unexpected situations, as did the militaries of other countries. The troops must pay attention to the local political, economic and religious differences.

The Diet will have to take more responsibility than it has ever done. The Koizumi administration must make public all relevant information. Especially, the ruling and opposition parties must continue to keep a keen eye on the government's actions. Together, they must not hesitate to revise the basic plan to deploy SDF troops as the situation on the ground evolves.

And, to improve SDF troop safety and make their operations more meaningful, the end of the U.S.-led occupation and the setup of an alternative system of rule should be accelerated. That is ultimately the greatest duty of the prime minister who is now sending his troops into a war zone.

—The Asahi Shimbun, Feb. 3 (IHT/Asahi: February 4, 2004) (02/04)